詩集

花粉

鳥井稔夫
古野菊生
古田土光良

詩集　花　粉　目次

鳥井　稔夫編

錆びたアルフィネッテ
冬の声
流れ
候鳥
窪にある水溜り
子供の実
いつまで待っててくれるのか
土まんじゆう
壷をいだいて
お徳さん
釣
エンシャーダ
窓のあいてゐる日

古野　菊生編

五月の歌
萬菓ぶり
玉葱の詩
ある日
世にも美しい詩を
木葉化石
列車転覆事件眞相
虚の胡桃
生活の車
願望
上り郊外列車
櫨の樹の詩
たれかうつるをとどむべき
山の上の岩に坐れば
望郷
桑の実の熟れるジプシー村の洗濯場で
流離の歌（訳）

古田土光良編

足跡
望郷
食卓
白路
貧しき画家
永遠の裏陰
森べ海べ
地平
余光
流木

装幀　田中重人

鳥居稔夫（とりい　としお）編

雑草のやうに私はうたって来た。太陽と空気と、新鮮で、豊富で、暢やかであったこの土地で、私は素朴であった。今顧みる二十年を超える境野の生活の裡に、多少とも力づけとなってきた、この荒けづりの詩の像が、人の前に出るなどと夢にも思はなかっただけに、処女のやうな羞恥で胸が痛むのだけれども、逐に私は先輩古野さんの誘ひに應じた。十八歳で渡伯した私に高い素養のないことを知って頂ければーブラジルの邦人コロニアにて乏しい機会のために、伸びんとして萎縮し行く多くの若人に対し、更なる誘ひともなるのではないかしらと、この想ひに力を得てゐる私です。自己に定まる位置もなく、若干の先従に従いて、あれであらうか、これであるかと、彷徨ふバガボンドであり、裸のまま野に育った私を、踏みしだいて頂ければ望外の幸です。萌え出る力と強く生き、逞しく枯れ行くことを、革めて信念する事の出来た、この私の小集を纏める機会に遭ったことを大きいよろこびとして、つつましくささげます。

錆びたアルフイネッテ（留めピン）

何心なく見つけたる
アルフィネッテ
妹の使ってた留物よ
胸のあたりによくあった

わしはペネーラで掬ったよ

去年まで
一しょにカフェ　さびたとこ
その頃なくしたものだらう

香りの高い花のころ
あえもなく
いたづき悩み散りはてた
お前は廿歳（はたち）の処女だった

「のぞみ留める」　と人のいふ
アルフィネッテ
ふとしたことで拾ったが
錆びててわしは寂しいよ。

（昭和九年）

冬の声

枯れ草の上に
冷い光が墜ちて
寂しい語ひをして居る
中空を
泣きながら　顛へながら
風の子が走って居る

その山かげで
金剛砂砥を当てがひ
斧を研ぎ澄して居る
私

今に　大地にたほれる
巨木の地響に
彼等の声は潜み
蒼々とした

静寂が訪れ
冬の禅場が生れることだらう。

（昭和九年）

流れ

流れがある。
そばに後生林（カポエイラ）のあって
傾斜地の中どころに廃屋が
牛に汚され残ってゐる。
尋ねれば　ー
華やかな昨日の豊穣と
耽溺の巣の衰頽と
常套の筋を
ボヘミアン流に物語らうとするだらう。

だが　流れには
族への憧憬でひたむきだ。

ムダンサの車を乗せた渡舟が
よぎる程の流れは　河をなしてゐる。
そこでは
浮草さへも　白い花をつけ
生命の躍動を囁いてゐる。

「棉作りに行くか

「さうだ！
活撥な返事だけが　渡舟の上から流れに
反響してゐるではないか。

水面には翠轡の影が映ってゐる。
汀に乙女の夏を洗ひ梳る姿もてる原始林だ。
旺んな繁栄への慾望が蒼然として
マラリアの熱と
フェリーダの貪欲と
ともどもに
はらからを導き寄せ　淵をなしてゐるところだ。

現実の物象のまにまに
もろもろの夢に映えながら
遠い旅を行き果てて
海へ注ぐものよ
漂泊の民の血潮　たぎり落ち
大らかなる時流の河床をゆきにゆく
滔々たる流れの姿ではないか。

侯鳥

晴れ晴れしてゐる。
賑はしい。
張り切ってゐる。
その群は
あなたから　こなたから
斜つかいに　とんでわたる。
翼ある　かたち。

五百ミル紙幣のインクの色をした
猛々しくはばたくもの
侯鳥よ。
そこ　ここの農村のをか
棉摘みの手をかざし
仰ぐかたに
饒舌を　ふるまって行く
ペリキートの群。

（注・小型のオーム）

窪にある水溜り

すべて映りくる　すがたみな…
かたへに疎なる樹々からも
空往く雲さへ　翳のこす

季節の花びら　ちりきたり
廣い地平越え来る　烏の言葉や
それらにもまして　郷愁の月よ
美しい人の　涙のごと　湛へあふれてあらうもの

カボコの土は　強くかわき
泌みがてに　消えがてに
のぞみ　すさみて　哀しき日よ
土足もて　たれか　しばしば掻き濁す

泉浅き　水溜り
胸の衷に　流れ出る　すべて失ひ

静かにかかげる　あはれ　手鏡。

（カボコ・辺地の人）

子供の実

椰子の実は　こどもの実
口に噛むこと　とどめがたし
病をば得てならじ　かく慄る母なれば
いたくよこれし　その掌より
またしてもポロポロ　こぼす
男の子　責められる
この父の実は　椎の実ぞ
ふるさとに　高く茂れる樹のありて
落葉うつ音もはろか
かの泣き　思ひ　むしろ慕はしや

あでかなる玩具一つ　えあたはず
貧しき　ある日
赤革のタマンコ　求めくれば
おかっぱ頭の　女の子らも
かなたの丘に　さんざめき
ゆさぶりあげる　ゆめの実ぞ
心にひゞき　空になる

今は　はや　飽くほどに　もぎとれよ

黄昏せまる　ひろ野はら
烏さえ　とくぞ　塒さす
おみたちは
夕飼せん　呼声　沓かに　きき　つるか
母またも　吐息　深くしあれどー

椰子の実は　いとしの実。

（タマンコ・ぽっくり）

いつまで待っててくれるのか

そこへ　私は　あをい作物をつくった。
若い血が　ねっとりと　しみていった。
白いシャツの　洗ひたてを着ては吹いた
あのうた口が　少しは　きれいかしら。

蒔いた種は　刈ってはおどろき
あの借物の土地に　もう飽きてゐるのです。
一冊のノートを　買ふやうに
自分の畠にしなければならない。
黒輝石の瞳のやうな　水々しい葡萄の房をならせ
黄色くうれる果樹を植ゑよう。
それが私の行動や知性であったりする夢の～
ひそかに育てる苗の芽を
きづつけないでゐるのですが
ああ　お嬢さん　あなたは　私をいつまで待ってて
くれるのでせうか。

土まんぢゅう

「人間到処在青山」
そんな生やさしい渡航ではなかった
空想よりも現實に追はれたのだ。ーー

かう率直に　言はれた老父は
ミモーザの花咲く　街路（まち）のはずれに
永遠の眠りをしてをられる
松籟（かぜ）のこもるやうな　ノスタルジーの夜更
故山に石　累々　苔蒸してる墓を
俺は捨ててゐる。・・・と済まなさうな語韻が
今もその部屋にはきこえるやうだがーー

今年も秋の仕舞を急ぐ　ムダンサを想へば
けむのやうに　むせつぽくなるのだ
わづかばかりの土を盛り　朽ちやすい木標を立てて
そのまま　俺の漂浪のすがたは

誰にうつたへようもないものだ
この感傷など知る筈もない子供等は
土まんぢゆう詣をまねび
小さい手では土すくひ　百目草をちぎりそへ
あどけない笑顔で　俺をせめるのだ

ぺらぺらの着物を着せて
巷をば鼠のやうに素通りした　みまゐりであったが
石に　み名を彫って立てようよと言へば
雀躍りしつつ　よろこんだ　子供等よ
　ミモーザの花が　今年もまた散って行くのだが。

壷をいだいて

明け方でした
壷を　いだいて　おきました
湛へられたものは　海のやうな思慕です
青空が滴って来たものです
たのしい　いのちのうたが　波うつてゐたやうです
ひとりでは　おそろしいので
誰かに　捧げようと
朝の食卓に　汲入れます
その緑の牛乳の囁きは
枯草の匂もしました

もうあの愛しい人は来ませんでした
たゞ人がそれを呑んで　酔はうとしましたが
はげしいよろこびもない世界は　静かなのです
荒野のやうに暮れるのでせう。
たまらない　かなしい夜が残ってゐます
再び　壷をいだいて
明け方へ　行けるのでせうか。

お徳さん

お徳さん　もう一度唱って聞せて下さい
あなたの喉は　あの民謡をとても美しく聞せます
でも、もう無理とは知ってゐます。ーー
掘立小屋の棲家は
軒端から畠に続いてーー家の中まで仕事が続いて
それでも小さい窓があって
空が故郷の空に似る秋に
そこからのぞいて　時たま口ずさんでも聞えやしません。

収穫の袋と　子供の数とーーもう計量は止めにしてゐて
日曜日のお洗濯の忙しい手を一寸休めては
一度は土地持ちであった亭主に
やめさせてゐたピンガを　〃気付け〃　に進めました。

移民船が新婚の旅であったことから
帰る日があることを幼児に聞せましたが
このポエムの末節にする　〃繰返し〃　は
お徳さんの胸底へ落ちる礫であったり
時計の刻みであつたりー！きちんと溜息が出ます。

大人になった学校がへりの惣領子は
お徳さんの言葉を　もう外国語だと言って笑ったとき
涙のない涙を　その荒れ果てた男のやうな掌で啜りました。
朝から晩まで　家の内から外にまで　一番の稼手で
もう歌を唱ふ日もないやうですが
もう一度　あの山峡の盆地に産れた恋うたを
自慢の喉で　聞せて下さい。

お徳さん

お徳さん

お徳さん

あなたに似た人ばかり
蟻のやうに続いて力強いすがたですが
みんな歌はないではありませんか。

釣

濁ってゐる底から
幾度も　空っぽこを上げる
根気と繋りながら
一本の細い　細い　思念の糸では
せっかくの僥倖も
戯れ墜ちるーー大魚なのだらうに
物静かな蔭に　座を占める
放心の一刻がなければ
激しい世界の回転には　目眩ひするばかりだ
大国の宰相の夢さへ結ばれた岸には
澱みもなければならないだらう。

大河も知らず
小心翼々と暮す者の
鱗に装った姿ながら
この小さいランバリーにさへ
青空のごとく澄んだ丸い目があって
私はハッとその空の色をつかむ。

（ランバリー・小鮒に似た魚）

エンシャーダ

私はあなたを梳った
私はあなたを揉みほぐした
私はあなたをほころばせた

尺一尺続け次ぎ
三千六百五十日
脊骨で牛弧の円描き
畝を築いたり崩したり
私はあなたに仕へ切った
私の皓歯はみなかけた
私の爪はすりへった
私の肉はなえかれた

私はあなたを謳はせた
私はあなたを誇らせた
私はあなたを獲なかった。

（エンシャーダ・鍬）

窓の明いてゐる日

窓が明いてゐる
家々の窓が　みんな明いて
南半球の四月の空に向いてゐる
青く　青く　深く
これ程に物思はせる深い底のあをい空

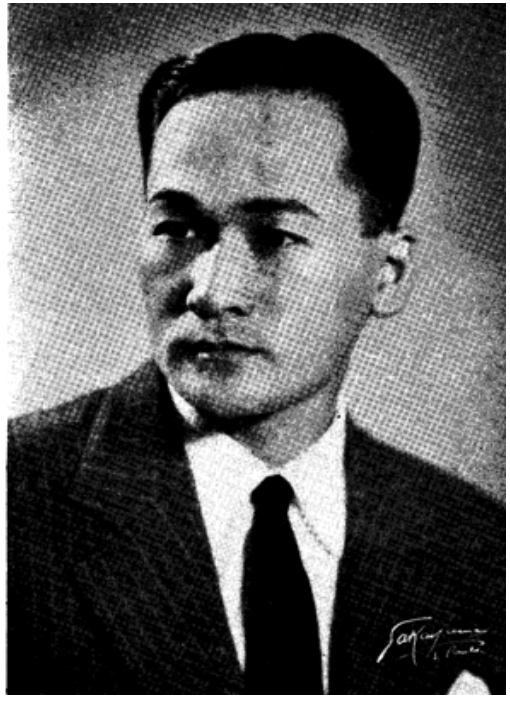
みんなの窓に映ってゐる明るさ
それには　丘の上に点々と　あかい
さくらまがひの
パイネイラの花が　大らかに映ってゐる日なのだ

心の底に沈んでゐる　みなの憶ひが
一時に咲く　この秋の花
とりいれの野の　色褪せさへ忘れさせて
遠いふるさとが
狭い生活の棲家の中に蘇って来ないわけがない

その恩ひ出の美しさの窓に拠ってこそ
一ばいの酒を含みたくなる
現実の不如意が忘れられて
母国を偲ぶ感動の面がほてり出す。

ああ　流離の人々よ
かうもさかんに　窓を明けてゐる日が
コロニアに　又とあるだらうか。

古野菊生編（ふるの　きくお）



少年のころから今までの詩のうち、
わりあひ気に入ったものをここに収めた。
これらの詩のほか、私に残るものは何もない。その詩すら
「虚（みなし）の胡桃（くるみ）のために虚の胡桃をいぢつ
てゐる」（ウイルヘルムマイスター）にすぎないやうな気
がする。

五月の歌

二重に纏（ま）いても
肩から胸になほ垂れる藤の花

この房の端っこ　剪ってしまひませうかしら
と　いふ少女

私は　ハーモニカを吹いてゐるので
きいてて　きかないふりをする。

萬葉ぶり

昼風に揺れてゐる
藤の花房のすだれから　のぞいて
あのひとが　おいで　おいでをする。

みてゐて　みないふりをしてゐたら
しばらくたつと
鼓の音がきこえて来た。

ぼくは　制服を着て来なければよかった。

玉葱の詩

アーヴァス通信ーー

「玉葱ハ軍需品ニ指定
　輸出ハ禁止サレタリ」

昨日まで一キロわづか一法（フラン）

泣けぬジュリエット、マノン・レスカウ

田舎廻りの名女優の　涙即製ーー

一朝めざむれば　ああ神よ！（モン・ジュウ）

催涙瓦斯原料ー軍需品

戦神マルタの小姓（バージェ）　発ある玉葱！

ある日

ある日　ぼくは　庭に出て
鋭き斧を揮って　薪を割った。
薪は激しき憤りあるもののごと
歯ぎしりして散乱し
破片は　牙となり　虚空を噛んだ。
はふり落ちる汗をもぬぐはず
てうてうと　薪を割った。
絶望の想ひ　極まれる　ある日。

世にも美しい詩を

葡萄の核を　かみかみ
ほそい夕月を見てゐると
世にも美しい詩を
作りたくなる。

木葉化石

かなしや
石と化りて　なほ
葉脈の　あざやかなる。

列車顛覆事件眞相

俺だって　時には　かうやって
ぬくぬくと土にねころんで　青天井を
ぽかんと眺めてゐたい気にもならあな
地球はまるつこいか知らないが
歩かなきや　ひとりでには
この図体がころがつてくれさうもないからな
　うるさくしないで
　ほっといてくれ。

虚の胡桃

その町は　爽竹桃で白く
いろんな　船の汽笛で
港はまるで　巨大（おおき）な合鳴鐘（カリヨン）だった

わたしは　移民で　若く
あひびきの日暮のやうに
船の出　待ちわびて　口笛を吹いた。

追っても　追っても　水平線は遠のき
やつと追ひつめると　大陸があって
船は　わたしたちを　嘔吐した。

大陸は　海よりも平かで円く
広原と青空は　球転のやうに廻り
わたしは　金や女と　いたちごっこした。

いつか　のろまで　疑い深くなり
歳月は「知慧」の花束の代りに　そつと

虚の胡桃　ひとつかみ　くれて
そそくさと　立ち去りをつた。
慈事の共謀（ぐる）者でもあるやうに。

生　活　の　車

若い母親が
乳母車を押すやうに
わたしも
生活の車をはこんで来たものだ。
たのしく　息を弾ませて。

願　望

半畝の果樹園と
フランシス・ジャムの詩と
うろこ雲のある夕空とー

こころなき商売の群に投じゐて
ひそかに想ふ
　脱獄を企つる囚人のごと。

上り郊外列車

朝焼けの空の下で
河は一條の紅いリボンであった。

和蘭種の牛によりそった少女が
われわれの列車にうちふる手

乳のこぼれ落ちる白い手
いや　あれは　コッポ　デ　レイチの花だ。

やがて　ユーカリ林のかなたから
のしかかって来る巨いなる都市へ

おのがじし　乗客たちは　武装しはじめる。

櫨の樹の詩

葉は　散りつくし
実だけがむれて　美しい　櫨の樹々
高い梢のかなたに
日ましに蒼む空
空の色に染みて
これもまた　日毎に蒼む海岸山脈（セーラ・ド・マール）。
聖家族をつつんだやうな
柔和に澄んだ空の下で
この瞬間（ときのま）も　なほ　たけなはに
人間同士のむごたらしい殺戮
血糊で綴ぢ合された
厚ぼったい暦の腐臭。

死すべきであったのだ
南の海の　かの紅い珊瑚礁の中でー
昧爽（よあけ）の　香り高い潮ぶきをあびる
赤熱した高射砲の砲座のかげで　ーー

櫨の実を仰ぐ
つぶら実は　枯れた梢に
虚しく　日々を　朽ち果てて。

たれか　うつるを　とどむべき

丘べの椰子よ　去（い）なしめよ
流るるままに　夕雲の
たれか　うつるを　とどむべき。

こぼれてかかる　椰子の実に
思ひぞいづる　さまよひの
傷（いた）みいみじき　草枕。

その昔（かみ）にして　この木かげ
まるき地平を　東西
指して語りし　地主ありき。

「拓きたがやせ　思ふまま
ひろき国土は　君がもの
緑の海は　君がもの。」
若き心の　たぎりては
火を吐く胸に　腕くみて
雲の涯を　凝視めたり。

はや枯れそめし　草しけば
かへりみすべき　夢もなく
ただ円（まどか）なり　月ひとつ。

天の原ふりさけみればかすがなる
みかさの山にいでし月かも

山の上の　岩に坐れば

山の上（へ）の　岩に坐れば
南（みんなみ）の広野の　涯
彩雲（あやぐも）の　下にうねりて
静もりぬ　海岸山脈（セーラ・ド・マール）。

大君の生（あ）まれましし日を
暁（あけ）に来て　このいただきに
山脈（やま）みるは　すぐる幾年
ひそかなる　ならひとなりぬ。

その昔（かみ）の　任き日の朝（あした）
母と子は　筑紫の海べ
防塁の　ほとりに立ちて
玄界の灘（なだ）に　対（むか）ひぬ。

「汝が遠き祖先（みおや）が血もて
きづきたる　これの防塁（とりで）ぞ
なゆるしそ　共闘の仇（あだ）に
皇国（みくに）の地　一歩たりとも。

灘指しつ　母の語れば
唇（くち）かみて　こぶしにぎりて
うなづきぬ　紺の香たかき

晴着きて　雅（わか）かりしかな。

天の戸を渡る　空しき

雲のかげ　山脈（やま）にかかれば

地の涯の　さびしき異郷（くに）の

岩山の　岩も冷えたり。

望郷

思ひ出は狩の角笛
風の中で音は消えて・・（アポリーネール）

潮風の　山脈（やま）より山脈に
声あげて　渡る日なりき

城址（しろあと）は　しろがねすすき
鳴るはただ松風なりき

月の出は　沈みし唐の
鐘響（な）るも　ふるさとの海

わが姉は　簪（かざし）に折ると

りんだうの　青きをたづね

われひとり　すすきを分けて

ひた恋ひぬ　異国の港

ふるさとの　かの城址の

松風よ　いつか逢ふべき

異郷（とつくに）の　屋根より屋根に

雨あしの　しろくわたる日

うらぶれし　いまのこころに

沁むはただ　遠き楽の音。

桑の実の熟れる
ジプシイ村の洗濯場で

道をたづねても　こたへはしないで
女たちのひとりが折ってくれる
桑の小枝
熟れた実で　おもい。

わたしは
大きな石にかけて
桑の実を　かみ
女たちは　また　歌ひはじめる。

ひろげた布は　泉のほとりに　牡丹雪のやうだ。

ーーどこへ行くの

歌のふしにまじへて　いちばん若い女が訊く。

わたしは　だまつて　桑の小枝を折ってやる。

折りながら　思ひ出す

作りかけて　でき上らない

わたしの　詩のことを。

すると

炎のやうなものが　胸をはすかひに

桑の実のいろに染ってーー。

流離の歌（訳）

わがふるさとに椰子ありて
サビアひた啼くそのかげに
ここにして聴くさへづりの
似るによしなきうれひかな

わが大空は星に富み
ひろ野に花の咲きまさり
いのちあふるる森ありて
愛（めぐみ）ゆたけき我が生活（たつき）

夕べさみしく偲びみる

幸多かりしかのくによ

わがふるさとに椰子ありて

サビアひた啼くそのかげに

ふるさとにのみあまたなる

妙（たえ）なるもののここになし

夕べさみしく偲びみる

幸多かりしかのくによ

わがふるさとに椰子ありて

サビアひた啼くそのかげに

な召しそ神よ　わが魂を

ふるさとにわが帰るなく

このくにに見むすべもなき

うるはしきものえ得もせで

サビアひた啼くかの椰子に

また逢ふこともあらずして。

ゴンサルヴェス・ヂアス

（一八二三―一八六四）

古田土　光艮（こだとみつよし）篇

男も女もうつくしく
青々と住むくにを
憧れたづねてきた私の昨日の足跡

足　跡

いづこより来る
いづこに去る
この足跡
この足跡
砂風のつよくとぶ日も
冷雨のないてふる日も
かつて消えずに・・・

ふるきむかしの人達よ
なにをもとめて去にし
とほき未来の人達よ
なにをのぞみて来る
この足跡
かつて語らず
かつて消えず
われもふむ　亦　この足跡。

望郷

おれはおれの米がほしい
それから鍋がほしい
しづかな大気に枯木のけむりをあげ
地平に向つてゆっくりと食べたい
睡りくればいいね
光とほく夢もわすれて
働きたい

あかい裸の自然の子になって
樹をうえたい
泉はふかく地軸にとゞき
枝は四方のくにぐにが見え
けっして伐らない樹をうえたい
時間のないひろい村里に住んで
おれはおれの愛する思情を
霞のやうに遠くとほく流したい
つひには落陽の丘の墓標となって
永遠のかなしい光をながめよう。

食卓

花なれば花を
土なれば土を
透明な皿に盛り
沈黙のひろい食卓
時の白布をゆるゆると垂れ
誰か待つ
牧草の友のくるまで

白路

渺茫と一面に山を
こえ渡りてくる風の
生ひとびたちし地を想ふ日なり

広野に一てきの紅をおとし
耕す女の目に入る日なり

牛車とその年は何の荷をつみて
いづく指して
重きさだめを曳きてゆくらむ

その行路の遠きところに
わが旅のつらなり
解放の匂をもとめ行くごとし

貧しき画家

みづ色のいろを描かんと
えのぐをとく
えのぐをとく
溶きてはみれど
こゝにきたるは灰色の影
いくたびも　いくたびも
ときてはみれど
青明のいろを持たざる
われはつたなく貧しき画家
灰色のたそがれをゆく旅の画家

やせはてよ

やせはてよ

心ばかりとやせはてよ

はてる心に

せめて一刷毛みづ色を

永遠の裏陰

おれ等はどこに住んでゐるのだらう
ここは一体どこなのか
地球からとほい空気もない永遠の陰ではないのか
いつからおれ等はここにきて
みすぼらしい姿となってかうして
夜も昼もない空白のところに
何をさがしてゐるのだらう
おれ等はつひに人間を失してしまったのではないか

このおれ等のおれ等は
風でもない空気でもない獣でもない
何でもない空なのではあるまいか
おれ等よ

何でもない無のおれ等よ
その空無のそこに僅かでも
美と真実の記憶が
かすかにでもあれば
魂のながれる方角に辿りかへらうではないか。

森　べ　海　べ

たれもいない森のなかで
あゝあゝ　と烏がないてゐる
黒い喪服をきて
すてられた姿で
泣けるだけ泣くがよい
涙にまさる真実はない森で
海のほとりで
かには砂をかぞへてゐる

きいろい年月があとから　あとから

砂をはこんでくる

やり切れない気持で

ぶつぶつ泡をふきながら

森のむかふの遠い空から

波のはてしの畑のなかから

じっとみてゐる一つの目

地　平

傾く世界をするどく馳けてくだるものがある
暗雲の視界をとび抜けきたる一羽の黒鳥をみたり

凶荒の兆はまきて気流のうづとなり

弾々と一面に地を薇ひ来るとき

あゝ遠く萬象のはて
はるかなる地平
はるかなる地平よ
亡びざる眞理をやどし
時空のかなたに澄みさえて

青々と悠久をわたる生物の遠影よ

創痍の心を地に理め

一切の繋縛をきってとべよと
一切の抱擁にきたり融けよと

余光

苦しくもまた楽しかりし旅は
こゝに暮れようとしてゐるのか
つめたい風は
吹きぎたり　吹きさり
この道はやみに消ゆれど
とほくは夜明のくににつづきて
夢よりもあはき幻に招かれてわれは行く
一足はおもく
…さすらひの地に散りし花のかけらよ
一足はたかく
ー余光の空に音もなく流れゆく雲の方位よ
生涯はふたたびこの地にかへることなく

讃へよ
されど讃へよ
この暮れおちるひとときに
われら美しき刹那を
はてしなく生きつづくいのちを

たぐひなき性情をしみじみなで
そのうるほへる影をほれぼれとみ

暁とともに
泣く子にきん色のひかりを
女に解放とあを空を
汚醜と狭隘のそとに生活の風光をひろめるはよし
すべては流れてとどまらぬ宇宙のほとりに
涙とよろこびの弾きいづる調べをききて
みよや

一瞬　一瞬のひかり尊くとび去るを

流　木

雲はそつと生活をとりあげ
やうやく傾く遠い方へはこんでゆく
私はもうたゝかふ心はなく
くづるゝ一つの形となって見おくる
ばらばらのものも調和あるもののもあるのだ
一日はそのやうにあつても
つぎの日は高貴であっても
とほいくにに生れでるまではなににならう
愛撫しはぐくんできたものよなげくや
小さものをひしと抱いてなげくや
かくもはかない約束は大きな約束にとけて
白雲の夢はるか流れて行ったのだ

恩愛もふりさびてさすらふ山麓
むなしい時の集積よ
たかいたかい運命にひかれて
青空のうすれるかなたに消え去るときもあらうか
いつかは山頂にたって本能の叫びをきく日もあらうか

回顧の草原にしばしやすめよ

土と空と風とさらになきところに
骨のまゝ　肉のまゝ

あゝ　　しかし
いつまでこゝにかくあるか。

花　粉

昭和二十六年十二月一日　発行　　定価　２００円

著　者
鳥井稔夫
古野菊生
古田土光良

印刷所
東京都新宿区市谷加賀町一ノ十二　大日本印刷株式会社

発行所
東京都千代田区紳保町一丁目五〇
株式会社　泰　文　館